

## 国立民族学博物館所蔵クルアーン写本紹介

竹田 真理\*

The Qur'an Manuscripts in National Museum of Ethnology in Osaka

TAKEDA Mari

Some universities, libraries and museums in Japan hold Qur'an manuscripts, such as The University of Tokyo, Kyoto University of Foreign Studies, Tenri Central Library and Toyo Bunko (the Oriental Library). The National Museum of Ethnology in Osaka, also, holds several manuscripts of Qur'an, but they are not widely known. The purpose of this essay is to introduce some of the Qur'anic Manuscripts held in this museum.

The Qur'anic manuscripts introduced here are as follows;

I: part 11 of a 30-part Qur'an in Bihari script with a Persian translation. It includes an endowment text in Persian (probably early 10th century A.H.)

II: a Qur'an in Persian Naskh script with beautifully illuminated double spread page containing the first sura and the beginning of the second sura. It has a colophon signed by Muḥammad Muhsin al-Nayrīzī, dated 1121 A.H.

III: two unbound Qur'ans in Sudani script, one of which is kept in a leather bag. Both of them have colorful patterns to mark divisions of the text.

IV: a Qur'an from Aceh, Indonesia, with illuminated double spread pages in three places; at the beginning, the middle and the end of the Qur'an.

V: two Qur'ans in Ottoman Naskh script produced in accordance with the standardized page-setting of the Ottoman Qur'an in the 18th and 19th centuries. One of them is signed by Hasan al-Ḥusni, dated 1279 A.H.

### はじめに

日本でも複数の大学・図書館・博物館がクルアーン写本を所蔵している。東京大学東洋文化研究所所蔵のダイバー・コレクションは写本の書誌情報と共に画像がネット上に公開されており、十余のクルアーン写本の画像も見ることが出来る<sup>1)</sup>。京都外国語大学附属図書館所蔵の『スルタン＝ハミド・コレクション』のアラビア語写本の中にもクルアーン写本があり、目録には写真はないが書誌が掲載されている<sup>2)</sup>。東洋文庫は1372年と1595年のものとされる2つの写本を所蔵し、2015年には同ミュージアムの「もっと知りたい！イスラーム」展で展示された。天理大学附属天理図書館は16世紀頃のペルシアのものとされるクルアーン写本を所蔵している。

以上のクルアーン写本は比較的良好に知られているが、国立民族学博物館所蔵写本についてはあまり知られていないのではないだろうか。その一部について実際に閲覧する機会を得たので本稿で紹介したい<sup>3)</sup>。

\* 日本アラビア書道協会会員

1) Daiber Collection Database, <[http://ricasdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/daiber/db\\_index.html](http://ricasdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/daiber/db_index.html)>.

2) [堀川ほか 1998: 1-3] Ar.1~Ar.6. Ar.7は en'am-i šerif (祈祷書の1種)と推測される。

3) なお本稿のアラビア語のローマ字転写は、ターマルブータ表記を除き原則として『岩波イスラーム辞典』方式とするが、クルアーンの章句には語末母音を表記する。

## I ビハーリー (bihari) 書体のクルアーン写本——ジュズウ (juz') 11 (16世紀?)

国立民族学博物館図書室所蔵図書 F704000458

### 1. 装丁・紙

写本作成時ではなく最近の装丁である。紙のサイズは約 23cm × 16.5cm (綴じ代約 1cm)。48 葉。ほとんどの葉に染みがあり、補修された葉もある。元の葉から少し小さめに切り揃えられたのか、欄外の模様の一部が切れている。

### 2. 彩飾頁

f.1a (第1葉表頁、以下同様。裏頁は b で示す) は外側から中心に向かって、幅広の青、細い無地、細い青、やや幅広の無地の円、そして青の5つの同心円が描かれている。中心に al-juz'u al-hādiya 'ashara (ジュズウ 11) と、金色のスルス (thulth) 書体で書かれ、クルアーンを 30 のジュズウに分けた 11 番目のジュズウであることを示すタイトル頁である [図 I-1]。



図 I-1



図 I-2

巻頭の f.1b と f.2a の見開き頁も彩飾されている [図 I-2]。中央のテキスト枠はほぼ正方形で、内側から順に青い線、細い金色、それより幅広の青、幅広の金色、細い白の五重枠となっている。その上下に赤い枠で囲まれたパネル(長方形

部分)があり、中は青い地に赤、ピンク、白、金色などで花の模様が描かれている。その外側、綴じ側を除く3方を囲む枠は、青地に白い波線で大きくジグザグが描かれ、金色の植物文様と小さい赤い円形、楕円形の模様がある。その枠から外側に青い線模様が伸びる。f.1b には修復のために薄い紙が貼られている。

クルアーンのテキストは9章94節の ya'tadhirūna から始まり<sup>4)</sup>(終わりは11章5節)、黒で縁取りした金色のビハーリー書体で3行書かれている。各行の下には赤字の小さいナスフ (naskh) 書体のペルシア語逐語訳がある。テキストの母音符号は細い黒字で記されている。この他、後述するように、章題のある頁も彩飾されている。

### 3. テキスト部分

f.2b 以降は、外側に青線、内側に赤い2重線のテキスト枠(約 16.5cm × 11cm)が描かれ、その中に各頁7行ずつ黒字のビハーリー書体でクルアーンのテキスト、各行の下に小さい赤字のナスフ書体でペルシア語の逐語訳が書かれている。テキストの Allāh の語だけは金色で書かれ、黒で縁取りされている。紙には mastar (または mistar, 枠木枠や厚紙に糸を張った道具。その上から紙を押さ

4) 以下、章番号・節番号はマディーナ版クルアーン [al-Qur'ān al-Karīm 1430AH] に従う。同クルアーンではその1節前の93節からジュズウ 11 が始まる。終わりの位置はこの写本と同じ。

えて跡をつけ罫線にする [Derman 1998: 13; Blair 2006: 47, 49]) を使ったと思われる筋が見える。行間は 1.7cm 幅と 0.7cm 幅が交互になり、1.7cm 部分にテキストが、0.7cm 部分に訳が書かれている。テキスト 7 行目はすぐ下が枠線になり、その行のペルシア語訳はテキスト枠外にある [図 I-3]。



図 I-3

ビハーリー書体とは 14 世紀頃から 16 世紀にかけて、デリー・スルタン朝とムガル朝初期のインドで、主にクルアーンを書くために使われた書体である<sup>5)</sup>。いわゆるナスフ書体の 1 種とも言えるが、文字は大きく書かれ、左横または左下に延びる線が太く長い、ص *sād*、ض *dād*、ط *tā'*、ظ *zā'* の文字のループの部分のかなり大きい、و *wāw* の上部がほぼ三角形である、د *dāl*、ذ *dhāl* が大きめであるなどの特徴がある。母音符号は文字の太さに比べると細く、ほぼ水平に近い角度で書かれる。この書体が使われた時期と場所が限定されることから、写本はおそらくデリー・スルタン朝下のインドで作られたものと考えられる。ペルシア語訳に使われているナスフ書体も、ビハーリー書体のように語頭の *kāf* の斜線の先が少し下に折れ曲がっている、*dāl* が大きめであるなどの特徴がある<sup>6)</sup>。右頁 (各葉の b) の左下欄外には次頁の始めの語がキーワード (つなぎことば) として書かれている。

#### 4. 章題

ジュズウ 11 は 9 章の途中から始まり、10 章 *sūrat Yūnus* 全部と 11 章 *sūrat Hūd* の冒頭部分を含む。f.15a の *Yūnus* の章題部分は、金色で縁取られた濃緑の長方形枠内の青い地に白の x 印模様、そこに黒で縁取りした金色で章名、啓示場所、その章の節数が書かれている [図 I-3]。文字はビハーリー書体ではなく、ナスフ書体に近い。枠の上にも金色の植物文様と白の波線模様が入った青地部分、さらにその上に青い線模様が描かれている。

f.46b の *Hūd* の章題部分は一部損なわれている [図 I-4]。前者と同様の長方形枠だが、枠の色は青、地は茶色。枠の上下の彩飾も異なっており、上はピンク系と青系の、羽か炎のような模様、下は青系の鱗のような模様が描かれている。枠内の文字は前者と同様である。左と下の欄外にスベード型の飾りが 1 つずつ突き出している。



図 I-4

#### 5. テキスト区分

各節の区切りには、黒で縁取られた金色の円が描かれ、その中心に赤点、円周に 5 個の青点が置かれているが、青点のないものも多い [図 I-3]。

9 章 123 節付近の欄外に彩飾模様があり、金色の ربع *rub'* (4 分の 1) の飾り文字が認められる [図

5) 由来については地名の *Bihār* のほか諸説がある [Gacek 2012: 19; Blair 2006: 386; James 1992: 102; Losty 1982: 38]。

6) ビハーリー書体のクルアーンに付されたペルシア語注釈などに使われているナスフ書体について、Brac de la Perrière は、*naskhi-divānī* (トゥグルク *Thugluq* 朝の勅書に用いられている書体の呼称 [Losty 1982: 55]) との類似を指摘しているが [Brac de la Perrière 2003: 89-90; 2008: 140]、Blair は両者の関係について言及していない [Blair 2006: 383-385]。

I-5)。また10章30節付近の欄外には別の模様があり、赤字で *النصف* al-niṣf (2分の1) と書かれている〔図 I-6〕。10章70節付近の欄外には模様はないが、赤字で *ثلاثة ارباع* *thalāthat arbā'* (4分の3) と読み取れる文字が書かれているが、一部が切れている。これらはジュズウをさらに4つに分けた、それぞれの位置を示している。

ほかに、欄外の数カ所に金色や赤や黒で *ع* 'ain の文字が書かれている〔図 I-3〕。これは *ركوع* *rukū'* のマークである<sup>7)</sup>。*rukū'* は礼拝の屈折礼のことで、イスタンブル版クルアーンの巻末には、読誦者が屈折礼をしたい時、ここで *rukū'* をするのが良いという印であり、それは話や教えの区切りであるからだ」との説明がある〔*Kur'an-i Kerim* 2010〕<sup>8)</sup>。



図 I-5



図 I-6

## 6. タジュウィード (tajwīd) 記号・キラア (qirā'a)

クルアーン写本にはタジュウィード (正しい朗誦法) の規則を示す記号が記されていることが多い。この写本ではテキスト文字の上に小さい黒字で *م* madd の文字が書かれているが、これはモーラ (拍) を長くして読むことを示すマッド記号である。通常マッド記号は横線で表されるが、ここでは元の文字の形がそのまま残っている。テキストの文字の間には ط, لا, ج, j などの小さい文字記号が赤や黒で書かれている。f.2b ではテキスト文と同様、この文字記号も金色である。これらはタジュウィードの規則の一つ、ワクフ (waqf: 休止、読誦の途中でいったん止まること) の是非を示す記号である。これと同様の文字記号が多くのクルアーンの写本や、各地の刊本に記されているが、これらは *Sajāwandī* による記号である<sup>9)</sup>。また、同じ子音の重なりを示すシャッダ (shadda) 記号のほかに、母音を伴わない n 音 (タンウィーン *tanwīn* の n 音を含む) に続く r, l, m, w, y の音の文字の上にもシャッダ記号が記されている<sup>10)</sup>。

この写本がどのキラア (読誦法) に基づいて書かれているか調べてみると、ハフス (Hafs) 伝承とほぼ一致した。たとえば10章35節を *an(m) man(l) lā yahiddī* と読むのはハフスとヤアクーブ (Ya'qūb) だけであり〔*Khārūf* 2000: 213〕、45節を *yawma yaḥshuru-hum* と読むのはハフス伝承だけである〔*Khārūf* 2000: 214〕<sup>11)</sup>。しかし、2節の、ハフス伝承では *hādhā la-sāḥirun* とすべきところを、*hādhā la-siḥrun* と他の読誦〔*Khārūf* 2000: 208〕で書かれており、ハフス伝承とは一致しない。また9章100節は *tajrī tahta-hā* とあるが、イブン・カスィール (Ibn Kathīr) の読誦〔*Khārūf* 2000: 203〕のように、*tajrī* と *tahta* の間に小さく *min* の語が付け加えられている。

## 7. 奥付

f.47b の途中でジュズウ 11 の本文が終わり、その下と次の葉にこれをワクフ (waqf: 寄贈財産)

- 7) James は 'ayn の文字を、'ashara (10) のことで、クルアーンの10節ごとの印として欄外に書かれることのある 'ashara の語の代わりにインドでは 'ayn の文字を使うとの説明をしているが〔James 1992: 104, 217〕、実際は *rukū'* のマークであろう。
- 8) またバイルート版には「クルアーンを2年で暗誦したい者にとっての1日分」という説明がある〔*Wa-innā nahnu nazzalnā al-dhikr wa-innā la-hu la-hāfiẓūn* 1973〕。現在、マディーナ版には *rukū'* は記載されていないが、インド・パキスタンや東南アジアの版には記載されている。クルアーン写本においてはインドだけではなく、一部のベトナムのクルアーンにも *rukū'* のマークが記されてきた。
- 9) Abū Tāhir Muḥammad bn Tayfūr al-Sajāwandī (d.1204) のこと。彼には *Kitāb al-waqf wa-al-ibtidā'* などの著作がある。これらの記号の意味については付表参照。多くの写本にはこれらの基本的記号に加えて他の文字記号も使われている。
- 10) 朗誦における *idghām* (次の音への同化) を示すと考えられる。
- 11) 他の読誦では *yawma nahshuru-hum* と読む。

とする文書がある。書道的な書体ではなく形の崩れた文字である。ワクフ文書に使われるクルアーンの引用箇所(2章181節)以外はペルシア語で書かれている。最後に日付が記され、読み取りにくい、ビハーリー書体が使われた時期から、イスラーム暦908年ラマダーン(ramādān)月(西暦1503年)と考えられる〔図I-7〕。

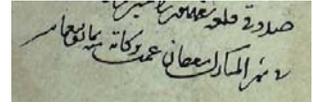


図 I-7

## II ペルシア・ナスフ書体のクルアーン写本 (イスラーム暦1121年/西暦1709年)

国立民族学博物館所蔵標本 H0012302 イランで収集

### 1. 装丁・紙

赤茶色の無地の革表紙の装丁であるが、元の表紙の上に貼られたものらしく、中央のアーモンド形のメダイオンとその上下にペンダントという典型的な図柄が下にあるのが分かる。小口カバーはない。紙のサイズ約33cm×20.5cm。273葉に加えて遊び紙が前に2枚、後に1枚ある。

### 2. 彩飾頁

f.1aは白紙で、その裏面のf.1bとf.2aが彩飾見開き頁になっている〔図II-1〕。中央のテキスト枠を挟んで上下にパネル(長方形の部分)があり、その上に金色、青、黒、赤、紫色で彩飾された豪華なヘッドピース(頭部装飾)が置かれ、欄外も金色の植物文様で埋め尽くされている。テキスト枠内は右頁にクルアーン1章 *sūrat fāṭihāt al-kitāb*、左頁は2章 *sūrat al-baqara* の冒頭部分が黒字5行で書かれている。文字部分は雲形に囲まれ、その外側は金色に塗られている。テキスト枠の上のパネルには赤字による章名、その章の節数、啓示場所、下のパネルには、啓示場所の続きと、クルアーン写本巻頭部に置かれることの多い「浄められた者だけしかふれることのかなわぬもの、万有の主の啓示である」(56章79-80節)の語句がある。この写本の彩飾頁はこれだけである。



図 II-1

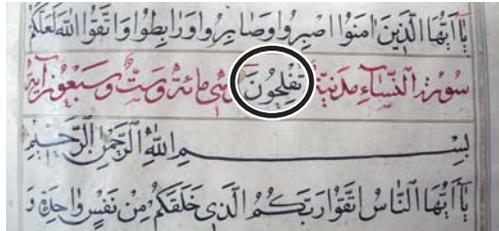
### 3. テキスト部分

f.2bからテキスト頁になる。テキスト頁は綴じ側を除く3辺に黒の2重線が描かれ、約31.5cm×20cmの大きな外枠を作っている。そして頁の中央、やや綴じ側寄りに約26cm×14.5cmのテキスト枠がある。テキスト枠は外側から順に青線、黒線、黒で縁取りされた金色の約2mm幅の線、1.5mmほどあいて黒で縁取りされた金色の約1mm幅の線から成り、テキストが15行書かれている。彩飾頁を含めテキストはペルシア風ナスフ書体である。この書体は17世紀後期から18世紀初期にかけてイスファハーンで洗練され、それ以後のペルシアの書家の手本・標準となった。文字・母音符号ともに黒字。縦線はほとんど傾きを持たず垂直で、単独の alif は tarwīs (セリフ、上端の

ひげ飾り)を持たない。lāmは上端左側に tarwīs がある。ت tā'などの2点は横ではなく縦に並べて書かれることも多い。全体的にゆったりと書かれ端正で美しい。母音符号も丁寧に記載されているが、無母音を示すスーン(sukūn)は小さな円ではなく下側の開いた小さな山形が使われている。右頁の左下欄外には小さめの文字でキーワードが書かれているが、それにもかかわらず乱丁の箇所がある<sup>12)</sup>。

#### 4. 章題

章題はテキスト枠の一番内側と同じ、黒で縁取りされた約1mm幅の金色の細い線で枠が作られ、その中に赤いリカーウ(riqā')書体で章名、その章の節数、啓示場所が書かれている(彩色頁のパネルの中も同様に赤のリカーウ書体)<sup>13)</sup>。前章テキストの最後の部分が章題の枠内に入り込んでいることもある[図II-2の円内]。リカーウ書体はスルス書体を小さくし



図II-2

てさらに丸みを持たせた書体である。س sīnの前半部分を伸ばして書く、本来は連結しない alif と lām を連結して書く、語末の hā' や tā' marbūta を丸くせずに下向きの短い線だけにするなど簡略化することも多い。さらにこの写本の表題ではイフマル(ihmāl)記号が装飾的に多用されている。イフマル記号とは、点のない(muḥmal)文字を、同形の点のある(mu'jam)文字と明確に区別するための記号である。当該文字の下に(ハの場合は上に)その文字を小さく書いて記号とする(ح、ع、ه、س、صなど)<sup>14)</sup>。アラビア文字書道ではこれらの記号はやがて本来の意味を離れて点のある文字とも一緒に使われるようになったが、この写本でもとと共にハの記号が使われている。テキスト部分にはこの記号はほとんど用いられていないが、バスマラ(basmala: bi-smi llāhi al-raḥmāni al-raḥīmi)には用いられている。

クルアーンの章の名は元から決まっていたものではないため、刊本、写本によって様々な名前が使われているが、この写本では32章だけではなく第41章(マディーナ版では sūrat fuṣṣilat)も共に sūrat al-sajda の名が付けられている。また35章は sūrat al-malā'ika (同 fāṭir)、40章は al-mu'min (同 ghāfir) となっているほか、たとえば92章 sūrat wa-l-layl のように、誓いの wa を入れた形の名前になっている章が幾つかある。

#### 5. テキスト区分

彩飾頁を含め、各節を区切るのには、金色の小さな丸を黒で縁取りし、中心に赤点、円周を4つの青点で飾ったマークである。さらに5節目にはアラビア文字で5を示す hā' hā', 10節目には10を示す yā' の右に延びる形 𐤎 の赤字のマークを節区切りマークの上に添えている。その横の欄外にはリカーウ書体でそれぞれ خمس khams (5)、عشر 'ashr (10) と書かれ、節数が分かり



図II-3

12) 22章にあるべき1葉が23章の中に綴じられている。

13) 一部の章題はオレンジ色や、少し色合いの異なるインクで書かれている。

14) Unpointed letters [Gacek 2012: 286]。文字以外の他の記号を使うこともある。

やすくなっている〔図 II-3〕。

ジュズウは、冒頭のジュズウ 1 を除いて、欄外に 45 度傾けた赤字のリカーウ書体で装飾的に、*al-juz' al-hādī wa-al-'ishrūn* (ジュズウ 21) などと書かれている〔図 II-4〕。各ジュズウはそれぞれ 4 つに分けられ、2 つ目は *hizb* (ヒズブ)、3 つ目は *niṣf al-juz'* (ジュズウの半分) または *niṣf* のみ、4 つ目は再び *hizb*<sup>15)</sup> の語が欄外に赤字のリカーウ書体で書かれている〔図 II-5, 6〕。ここでのヒズブはマディーナ版クルアーンのヒズブ(ジュズウの半分)ではなく、ジュズウの 4 分の 1 に相当する。

クルアーン読誦中にサジュダ *sajda* (平伏礼) をする場所を示す印も欄外に赤字のリカーウ書体で記されている。単に



図 II-4

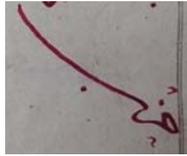


図 II-5

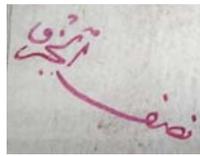


図 II-6

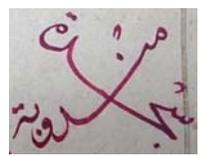


図 II-7

*sajda* と書かれている場合と、*sajda mandūba* (推奨サジュダ) あるいは *sajda wājiba* (義務的サジュダ) と 2 語で書かれている場合がある<sup>16)</sup>。後者の多くは 2 語を交差させるなどして視覚的効果を与えている〔図 II-7〕。欄外に書かれたこれらの赤字のリカーウ書体の文字は美しく、彩飾と同様の効果がある。

写本全体ではないが、部分的に *rukū'* を示す *ع* 'ayn マークが欄外に赤字で書き込まれている〔図 II-3〕が、他のマークとはインクの色合いが少し異なっている<sup>17)</sup>。

## 6. タジュウィード記号・キラア

テキスト文字の上側に、マッド記号(緩やかな曲線)と *Sajāwandī* のワクフ記号が赤字で記されている。すぐ前のワクフ記号と同じであることを示す *ك* の文字記号も使われている。

キラアについては、数箇所を調べたところではハフス伝承に従っている。

キラアと直接関係はないが、9 章 *sūrat al-tawba* が始まる場所の欄外に、*a'ūdhu bi-Allāhi min al-nāri wa-min sharri al-kuffāri wa-al-'izzat li-llāhi* の言葉が赤字で書き込まれている。この章がクルアーンの中で唯一バスマラがない章であることに関係があると推測される。ペルシアの他の写本や、テヘランで刊行されたクルアーンにも 9 章の始めの場所に同様の言葉が書かれている [Safwat 2000: 144; *Qur'ān-i Majīd* 1377AH]。

## 7. 奥付

最後の葉 f.273a にはクルアーンの最終章 *sūrat al-nās* のテキストが書かれている。それに続いてすぐ、ペルシア語で「朗誦前のドゥアー (du'ā: 祈り)」の語(赤字のリカーウ書体)、アラビア語の祈りの言葉(黒字のナスフ書体)、ペルシア語で「朗誦後のドゥアー」の語(赤字のリカーウ書体)、アラビア語の祈りの言葉(黒字のナスフ書体)と続く。その後、13 行目から最後の 15 行目まで、奥

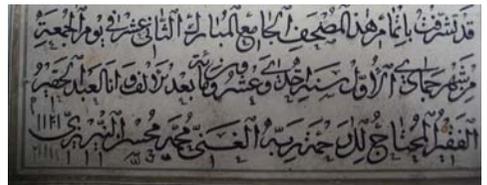


図 II-8

15) 数箇所のみヒズブの代わりに *thalāth(a)* (3. 4 分の 3 のこと) と書かれているが、他の部分とはインクの色合いや筆跡が少し異なる。

16) 他の地域のクルアーン写本では *wājib* と *mandūb* の区別はないが、ペルシアのクルアーン写本にはこの区別があることが多い。

17) 青字の箇所もある。他のマークとは違う書き手によって書き込まれたのだろう。

付が黒字のリカーウ書体で記されている。それによると、これがこの書家による12番目のクルアーン写本であり、1121年ジュマダー・ウラー (jumādā al-ūlā) 月の金曜日 (西暦1709年7月) に書写し終えたとある。書家の名は Muḥammad Muḥsin al-Nayrīzī である [図 II-8]。この書家については不明だが<sup>18)</sup>、この日付が正しいとするなら、それはペルシア・ナスフ書体の大家である Aḥmad al-Nayrīzī が活躍した時代である<sup>19)</sup>。

その裏面 f.273b には黒字でペルシアの詩人ハーフィズ (Hāfez) のガザール (ghazāl: 抒情詩) からアラビア語の詩句が書かれている<sup>20)</sup>。クルアーンの写本にこの詩句が書かれた理由は不明である。

### III スーダーニー (sūdānī) 書体のクルアーン写本 (おそらく19世紀)

A: 国立民族学博物館所蔵標本 H0227157 カメルーンのフルベ (Fulbe) 族から収集

B: 国立民族学博物館所蔵標本 C942370815 (中西コレクション)

#### 1. 装丁・紙

A: 傷んでちぎれたこげ茶色の薄い革の表紙を外側にかぶせてある。1枚厚紙のようなものがある。多くのスーダーニー書体の写本と同様、葉は綴じられていない。398葉と崩れてちぎれた紙片 (2葉分か?)。最初と最後の部分の葉はかなり傷んで崩れかけているが、その他は比較的良好な状態である。紙の破れを糸で繕った部分がある。紙のサイズは約 27cm × 17cm。一部の葉に3つの三日月 (tre lune) の透かし<sup>21)</sup>、SSBの文字の透かし<sup>22)</sup>が確認できた。刺繍された赤いスエード革の持ち運び用の袋が付属している [図 III A-1]。



図 III A-1

B: 厚紙に茶色の革を貼り付けたカバーを外側に巻き、小口も覆うようになっている。葉は綴じられていない。紙のサイズ約 16.5cm × 11.5cm。550葉。色合いや厚さが少し異なる葉がある。Aと同様、一部の葉に3つの三日月の透かしが確認できた。

#### 2. 彩飾頁

A、Bともに、彩飾された四角形の模様が4箇所に入っている。1章と第2章の間 [図 III A-2]、6章と7章の間 [図 III A-3]、18章と19章の間 [図 III A-4]、37章と38章の間 [図 III A-5] である。Aではそれらの模様はすべて異なるが、Bでは同じではないものの、どれもよく似ている。Bでは最初と2番目の模様の前頁にも小さな四角い模様が挿入されている [図 III B-1]。Bは赤茶、黄、焦げ茶の3色、Aではそれに加えて黒の4色が使われている。



図 III B-1

18) [Bayānī 1363] には Muḥammad Muḥsin の名を持つ書家が数人挙げられているが、al-Nayrīzī の名が当てはまる者はいなかった。

19) al-Nayrīzī については [Safwat 1996: 212-213; Bayani et al. 1999: 127-130, 160-165; Blair 2006: 425-428]。イラン、ファールス (Fārs) 州の町ネイリーズ (Nayrīz) に由来する名である。

20) 「サルマーは二本の巻き毛でわが心を縛った／わが魂は毎日私によびかけてくる」[黒柳訳 1976: 319]。このガザールはアラビア語の句とシーラーズの古方言の句から成る。

21) リーズ大学のスーダーニー書体の写本にも同様の透かしが確認されている [Brockett 1987]。

22) Walz はこの文字について述べているが、製紙業者は特定されていない [Walz 2010: 100]。



図 III A-2



図 III A-3



図 III A-4



図 III A-5

### 3. テキスト部分

A、Bともにテキスト枠の線はないが、Aは約15cm×9.5cmの範囲内に、Bは約12cm×6cmの範囲内にテキストが書かれている。Aは1頁15行の場合が多いが、一定しておらず、19行の頁もある。Bはほぼ15行に統一されているが、11行の頁もある。文字はスーダーニー書体と呼ばれるものである。スーダーン(Sūdān)はサハラ以南アフリカを指す言葉であるが、この書体はスーダーン地域中部から西部にかけて用いられ、マグリビー(maghribī)書体の1種とみなされている[Bayani et al. 1999: 32]<sup>23)</sup>。たとえば、ف fā'の識別点は下に1つ、ق qāfの識別点は上に1つであることはマグリビー書体の最もわかりやすい特徴であり、スーダーニー書体もその特徴を有している。その他 ص sād系文字の大きめのループ、それに続く突起がないこと、すばめた دāl、連結線より下に突き抜ける alifなど、マグリビー書体に共通する特徴がある。さらに、スーダーニー書体は、線が太めで丸みが少ない、識別点が大きいの、縦線が短い、基準線上の横線がほぼ直線的、8を横向きにした形の語中の hā'、語末の yā' が nūn と区別がつきにくい、語末の tā' や bā' の左端は上に向かず左に延びたままである、語末の nūn、fā'、qāf に識別点がないなどの特徴がある。文字・識別点は焦げ茶や黒で書かれているが、焦げ茶は黒が変色した可能性がある。母音符号は赤。ファトハ(fatha)とカスラ(kasra)はほぼ水平に書かれ、ダンマ(damma)は小さな wāw の形ではなく、左あきの楔形である。Bには3本の短い縦線だけのシャッダ記号も使われている。一般に使われているハムザ(hamza)記号は見られず、発音されるハムザは黄色い丸で表されている。長母音 ā を表す alif は、文字として書かれず、符号として赤の短い縦線で表されていることが多い。Aでは、預言者の名前ムハンマド محمد Muḥammadの文字が赤や黄色も使って他の文字より大きく書かれている[図 III A-6]。Bの1章の最後には本来はテキストには入らない āmin の語が入っている。各葉裏面の左下には次葉表面の最初の語がキーワードとして書かれている。



図 III A-6

### 4. 章題

章題は特に枠などが作られることもなく、前章のテキストに続いて章名、啓示場所、その章の節数が書かれている。書体も文字の大きさもテキスト部分と同じだが、赤が使われ、識別点と母音符号は黒で記されている。赤が変色して茶色くなり、テキストとの区別が目立たなくなっている。一般にバスマラは1行に収めることが多いが、この写本では赤字の章題に続いて黒字でテキストが書

23) しかし Brigaglia は、これはマグリビー書体以前のクーフィー書体(Kūfī)に起源を持ち、現ナイジェリアのボルノ(Borno)地方で生まれ、そこから広まったと考え、この書体の呼称として Barnāwī を提唱している [Brigaglia 2013]。



図 III B-2

かれているため、バスマラだけで1行になっていないことも多い。Bでは、章題の節の数と āya (節) という語との間にバスマラを挟んでいる箇所もある〔図 III B-2〕。

章名がマディーナ版と異なるものも多い。37章は sūrat al-yaqīn (マディーナ版では šāffāt)、38章は sūrat dāwūd (同 ṣād)、47章は sūrat al-qitāl (同 Muḥammad)、68章は sūrat nūn (同 al-qalam)、80章は sūrat al-a‘mā (同 ‘abas)、106章は sūrat al-shitā’ (同 quraysh) などとなっている。また75章、88章 (同 sūrat al-ghāshiya)、98章 (同 sūrat al-bayyina) がいずれも sūrat al-qiyāma の名前になっている。他の写本でも預言者たちの名が付いた章名には sūrat Hūd ‘alay-hi al-salām のように ‘alay-hi al-salām の語句が添えられることが多いが、この2つの写本では19章の、通常は預言者とは見なされないマルヤム (Maryam)

の名前にも ‘alay-hā al-salām が添えられている。また55章の al-raḥmān には ‘azza wa-jalla の語句が添えられている。

### 5. テキスト区分

各節の終わりには赤で縁取りされた黄色い丸を下に2つ、上に1つ積んだ形のマークが描かれている。上の丸に赤の短い縦線が付いていることもある。5節目の終わりは、黒で縁取られた赤いギリシア文字 δ デルタに似た形のマークが描かれている。これは5を表すアラビア文字 ه hā に由来すると考えられる。このマークの大きさはかなり小さなものから大きなものまで様々である。10節目には黒線の2重円の内側を黄色く塗り、2つの円の間に赤い2重線 (あるいは幅のある線) を4箇所入れたマークが入っている〔図 III A-7〕。

彩飾頁の項で述べたように、クルアーンは4部に分けられ、その区切りに<sup>24)</sup>四角い模様が描かれている。また全体を60に分け、その位置の印として欄外に円形の彩飾されたマークを置いている〔図 III A-8〕。このマークはそれぞれ違って様々な模様のあるものがある。各部分は8つに分けられ、その印として、ربع thumn (8分の1) を示す ث、ربع rub‘ (4分の1) を示す ب、نصف niṣf (2分の1) を示す ن の文字を囲む模様が欄外に描かれている〔図 III A-7〕。この模様も様々な種類があり統一されていない。またBではそれぞれ ربع、ربع、 نصف の文字がそのまま使われている箇所もある。ただし、



図 III A-7

24) 最初の模様は1章と2章の間にあるが、そこで区切られるのではなく、1章から次の区切りまでを最初の4分の1とみなす。ワルシュ (Warsh) 伝承に沿った現代のチュニジアのクルアーンも4部に分けられているが、最後の4分の1は36章からになっている〔Qur‘ān Karīm 1969〕。



図 III A-8

通常クルアーンの 60 分の 1 を示すヒズブの語そのものは現れず、30 分の 1 に当たるジュズウの概念も見られない。



図 III A-9

テキスト全体は 7 部にも分けられ、その位置には欄外に سبع subī (7 分の 1) という文字が 90 度回転して縦に書かれ、上記のマークと同様の円が縦に 2 つ続けて描かれている [図 III A-9]。インドやパキスタンのクルアーンでは manzil と呼ばれるクルアーンの 7 分の 1 の単位があるが、その分け方とは異なっている<sup>25)</sup>。サジュダも欄外に同様の円が縦に 2 つ描かれ、سجدة sajda あるいは الله سجدة sajdat Allāh と書いてある [図 III B-2]。

## 6. タジュウィード記号・キラア

マッド記号が赤の短い波線で記されている。また、文字の下側に赤丸が付されている箇所があるが、それは imāla (a と e の中間の発音) や hamzat bayna bayna (弱い声門閉鎖音) を示していると考えられる [図 III A-7 矢印など] [Brockett 1984: 111-114]。A には文字の上側に赤い 3 つの点が記されている箇所がある [図 III A-8 円内など]。この記号は他の赤とは色合いが異なり、後から書き入れられたものだろう。この記号について書かれた文献を見つけることはできなかったが、ワクフ記号と推測される。また A には後半部分で小さな赤字の 𐤀、𐤁 などのマークが見られるようになり、それとともにこの赤の 3 点マークはあまり見られなくなる [図 III A-10]。この小さな文字記号は、al-Dānī<sup>26)</sup> などのワクフの分類による waqf tāmm (言葉の上でも意味の上でも切れており、次につながっていないワクフ)、waqf kāfī (言葉の上では切れても意味は次につながっているワクフ) をそれぞれ表していると考えられる。

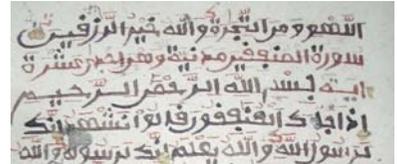


図 III A-10

数箇所を調べてみたところ、テキストはこの地域で一般的なワルシュ (Warsh) 伝承のキラアに沿って書かれている。上述の imāla の記号の使われ方もワルシュ伝承を示している。

## 7. 奥付

A、B ともになし。

## IV ジャウイ (jawi) 書体のクルアーン写本 (おそらく 18-19 世紀)

国立民族学博物館所蔵標本 H0166936 インドネシアのアチェ (Aceh) で収集

### 1. 装丁・紙

厚紙に黒灰色の布地を貼り付けた表紙で小口カバーはない。紙のサイズ約 27cm × 20.5cm。351

25) 有名なバイバルス (Baybars) 2 世の 7 巻本のクルアーン写本 (大英図書館所蔵) の区分に近い。  
<<http://www.bl.uk/onlinegallery/sacredtexts/sultanbaybars.html>>

26) Abū 'Amr al-Dānī (981-1053). *al-Muktafā fi al-waqf wa-al-ibidā'* などの著作がある。

葉。縁が傷んでいる葉も多く、最初の10葉ほどは綴じが外れている。インクの化学的変化のためか、紙が黒くにじみ、もろくなって破れかけている葉がかなりある。一部の葉にAGの文字やmaid of dort (PRO PATRIA)の図柄らしい透かしが確認できた。AGは19世紀イタリアの製紙業者Andrea Galvaniのイニシャルで、マレー地域のクルアーン写本にしばしば見られるという[Baker 2007: 94]<sup>27)</sup>。

## 2. 彩飾頁

f.1aは白紙で、その裏のf.1bとf.2aが巻頭彩飾見開き頁になっている[図IV-1]。中央のテキスト部分を赤、黄、黒、そして地の色である白の4色を使ったフレームで取り囲んでいる。綴じ部以外の3方向には中央に外向きのアーチ形が張り出し、その先端に飾りが付いている。横側のアーチには左右に羽根のような飾りがある。フレームの中はループを作る植物文様で埋め尽くされている。これらはすべてGallopがアチェ様式彩飾の特徴として挙げているものと一致する[Gallop 2004: 196



図IV-1

-200]。テキスト枠内には右頁はクルアーン1章 *sūrat al-fātiḥa*、左頁は2章 *sūrat al-baqara*の冒頭部分が黒字7行で書かれている。テキスト枠の上下に帯状の細長い枠があり、その中には黒地に白い文字で章名と啓示場所、その章の節数が書かれているが、右頁に *sūrat al-baqara*、左頁に *sūrat al-fātiḥa* と、誤って配されている<sup>28)</sup>。

これと似た彩飾頁が巻末(f.350b, f.351a)と、中間部(f.169b, f.170a)にある。巻末では右頁に113章 *sūrat al-falaq*が、左頁に最終章の114章 *sūrat al-nās*が、その章題と共にテキスト枠内に書かれている。1行目は赤字の章題、2行目から黒字のテキストで、合わせて7行になる。中間部の彩飾頁は18章 *sūrat al-kaḥf* 75節からのテキストで、1行目は赤、2行目は黒、以後赤と黒で交互に7行書かれている<sup>29)</sup>。

これらの彩飾頁の裏面は裏写りするためか、テキスト等が書かれず白紙になっている。

## 3. テキスト部分

彩飾頁以外の頁のテキスト枠は外側から順に赤、黒、赤、黒、赤の5重の線でできており、一番外側が約16.5cm × 11.7cm、枠内にテキストが文字・母音符号ともに黒字で13行書かれている。タイトルで「ジャウィ書体」としたが、これは適切な言葉ではない。jawiは東南アジア(bilād Jāwah)地域のムスリムによって書かれたアラビア文字書体全般に使われる言葉であり、シンプルなナスフ書体から、装飾的な書体まですべてを含む[Bayani 1999: 25]からである。この写本の書

27) 後者はアムステルダムの製紙業者B.CramerのPro Patriaの図柄にほぼ一致する[Churchill 1965: 98 Amsterdam 132]。

28) 同様の誤りは図録に掲載された写本にも例がある[Derman 2010: 92-93 No.17]。

29) Gallopによれば近隣の地域でもクルアーンの中間部に彩飾頁が入ることが多いが、アチェではジュズウ16の始まりである18章75節から、マレー半島東岸ではジュズウ15の始まりである17章1節から、ジャワでは18章1節からというように地域によって異なるという。ただし例外もあるとのこと[Gallop 2007: 199-202]。

体はオスマン朝やペルシアで発展した洗練されたナスフ書体とはかなり異なる。左に傾斜気味の縦線、幅の狭い文字、頭部がほぼ三角形の و wāw、م mīm や ه hā' や ء 'ayn などの文字の目の部分が大きめであること、ほぼ同じ高さに揃えて書かれた母音符号などの特徴がある。バスマラの م sīn と م mīm の間の連結部は定規を使ったかのように直線的である<sup>30)</sup> [図 IV-2]。右頁の左下欄外にはキーワードが書かれている。

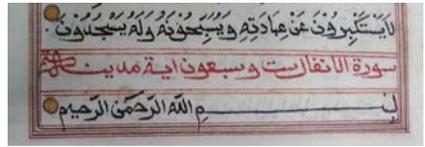


図 IV-2

#### 4. 章題

章題は赤の2重線で枠が作られ、その中に章名、その章内の節数、啓示場所が赤字で書かれている。その文字は大きさ、書体とも、色以外は本文と同じだが、しばしば tā' marbūta の文字が長く延ばされて複雑な結び目を作り装飾的である [図 IV-2]。これは他の地域でも見られるが、この地域で特に多く見られる特徴である [Gallop 2005: 203–209]。章題の枠の中に前章本文の最後の部分が入り込んでいることもある [図 IV-3]。章名は sūrat al-sajda の名が 32 章と 41 章 (マディーナ版では sūrat fuṣṣilat) の 2 つに使われているほか、sūrat al-faṭḥ の名が 48 章と 110 章 (同 al-naṣr) の 2 つに使われている。また 68 章が sūrat nūn (同 al-qalam)、76 章が sūrat al-dahr (同 al-insān)、96 章が sūrat iqra' (同 al-'alaq) などとなっている。



図 IV-3

#### 5. テキスト区分

彩飾頁を含め、各節は黒で縁取られた黄色の円で区切られているが [図 IV-3]、これはこの地域のクルアーン写本の大半に見られる [Gallop 2007: 192–193]。各ジュズウの最初の部分は赤字で書かれている。各ジュズウはさらに 8 つに区分され、重なり合った 3 重円を赤と黄で塗ったマークで区切られている。欄外には thumḥ (8 分の 1)、rub' (4 分の 1)、niṣf (2 分の 1)、そしてジュズウのマークが欄外に記されている [図 IV-4: 左から]。それらは外側から順に白、赤、白、黄、白の多重円の中に、図案化された ثمن、ربع、نصف、جزء の文字が白で書かれ、その周りは彩飾されている。この欄外のマークは区切りの箇所横ではなく、頁のほぼ中央の位置に描かれている。サジュダはこの写本には書かれていない。



図 IV-4

#### 6. タジュウィード記号・キラア

テキストの一部に赤字でタジュウィード記号が書き込まれている。マッド記号はかなり右上がり直線的に描かれている。テキスト文字の上側の小さい文字 لا、م、زなどは Sajāwandi のワクフ記号である。小さい ظ、خなどの文字記号も記されているが、これらは nūn sākina (母音を伴わない n

30) この地域のバスマラの装飾的工夫については [Gallop 2005: 196–99]。

音)の次の音への同化の有無を示していると考えられる<sup>31)</sup>。また、テキストの文字と同じ大きさの赤字の َ (= ni) を書くことによって、タンウィーンの前 n 音に続く hamzat al-waṣl の前に入れる補助母音を表している箇所がある<sup>32)</sup> [図 IV-5 円内]。

このテキストは一貫して特定のキラアで書かれてはいない。たとえば図 IV-5 にある部分 (19 章 7 節) ではテキストでは zakarīyā' のようにハムザ記号が書いてあるが、赤の×印を付けられ、欄外にハフス伝承ではハムザがないことを示す言葉が赤字で書き込まれている。ほかにも欄外にナーフィウ (Nāfi') のキラア、黒字でハフスのキラアを記した箇所など、キラアによる違いを記したものが数箇所ある。

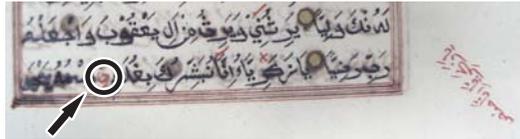


図 IV-5

## 7. 奥付

なし。

## V オスマン朝・ナスフ書体のクルアーン写本 (おそらく 19 世紀)

A: 国立民族学博物館図書室所蔵図書 0379910029

B: 国立民族学博物館所蔵標本 C942369510 (中西コレクション)

### 1. 装丁・紙

A: 赤みがかった濃い茶の革の表紙。型押し逆 S 字形を並べた外側の枠内に長方形があり、その内側には 4 隅にコーナー装飾、中央にメダイヨン、その上下にペンダント模様の型押し。コーナーとメダイヨンの内側は黄色く塗られ、植物文様が入っている。長方形の中には小さい円形の模様も幾つかある。裏側も同じ模様。小口カバー部分にも逆 S 字形を並べた模様が入っている。紙のサイズは約 19cm×13cm。305 葉。ただし、葉の順序が間違っていて綴じられている。

B: A とほぼ同じデザインの表紙だが、長方形の外側が焦げ茶、内側が赤に近い茶色の 2 色になっている。外側には S 字形が並んでいる。紙のサイズは約 21cm×14cm。遊び紙 1 葉 + 305 葉。f.1a に鉛筆で所有者の名前らしきアラビア文字と数字 (1282?) が書かれている。

### 2. 彩飾頁

A: 最初の頁は白紙だが、補修のためか薄い紙が貼ってある。その裏面は 1 章が書かれた彩飾頁である [図 VA-1]。中央左寄りのテキスト枠を上下のパネルが挟み、それを上・右・下側から、金色の地に赤、緑、濃緑、青、薄紫色などの模様が入った枠で囲む。枠の外側には赤と青の線で外側に延びる模様が描かれている。パネルの中はオレンジ色とピンクで囲んだ金色の地の部分があり、章題が書かれるべきところであるが、消えてしまったのか文字は見えない。テキスト枠の中は 1 章のテキストが黒字 7 行で書かれ、行間には金の雲状の模様が描かれている。現在、左側の頁には彩飾のないテキスト頁が来ているが、本来は右頁と左右対称である彩飾頁が来るべきである。2 章冒頭部のテキストを含むその彩飾頁は後ろから 8 枚目に綴じられている。こちらもパネルの中に章題

31) ط: اظهار izhār (n 音を完全に発音する)、خ: إخفاء ikhfā' (n 音は隠れ (= 弱まり) 鼻音を伴う) など。

32) このような َ 記号が使われる時は小さい文字で書くのが一般的。



図 VA-1

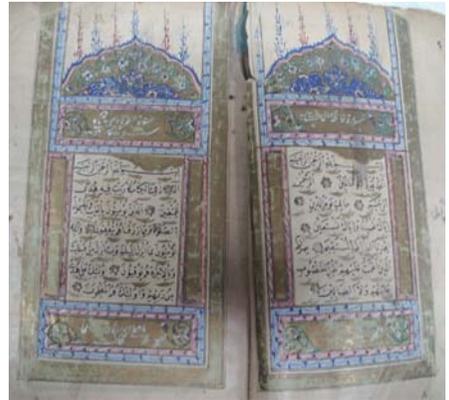


図 VB-1

の文字が見えない。

B: f.1b と f.2a の見開きが彩飾頁になっている〔図 VB-1〕。両頁とも中央綴じ部寄りのテキスト枠を上下のパネルが挟み、左右にも金色の部分がある。上部パネルの上には半円状のヘッドピース（外側は金色の地に緑、白、赤、ピンクの花模様、内側は青）が置かれている。その全体を右・左・下の3方から金色の幅のある枠が取り囲んでいる。青と赤の線模様がヘッドピースの上から延びている。上下のパネルは水色とピンクの枠に囲まれ、両側に花模様、金の地に白字で章題が書かれている。テキスト枠内は、右頁は1章、左頁は2章冒頭部のテキストがそれぞれ7行で書かれ、行間には金色の雲状の模様が描かれている。

f.350a には奥付が書かれているが、テキスト頁と同じ外枠の中に大きな卵型のテキスト枠があり、その枠の外側は水色の地にピンクと金色の花模様が描かれている〔図 VB-7〕。

### 3. テキスト部分

A、Bともに2章冒頭部の書かれた彩飾頁の裏面から通常のテキスト頁になる。どちらも各頁にテキスト枠が描かれ、外側から順に赤線、青または黒線、黒で縁取りされた2-3mm幅の金色の線になっている。枠の大きさは、Aは約14cm×7cm、Bは約14cm×7.5cmで、どちらも1頁に15行書かれている。Aには確認できなかったが、Bには外側の線と各行の基準線となる *mastar* の跡らしい線がうっすらと見える。テキストは彩飾頁を含め、どちらも黒字の1mm弱幅の細いナスフ書体で書かれている。オスマン朝下のトルコでは17世紀以降、クルアーン写本のテキストはほとんどナスフ書体が使われるようになり、この書体がますます洗練されていった。トルコのナスフ書体はペルシアのナスフ書体よりも細身で繊細である。この2冊の写本は一流の書家の書とは言えないが、細いペンを使いながらも線の太い部分と細い部分の差がきちんと出ており、個々の文字の形やバスマラなどもトルコのナスフ書体の規範に従って書かれている。右頁左下欄外にキャッチワードがある。

### 4. 章題

A: 章題は中央部をあけて外側を金色に塗った枠が作られ、あいた部分に赤字で章名、啓示場所、その章の節数が書かれているが、かなり雑な書き方である(図 VA-2)。本来は続けて書かない文字が続けて書かれているのはリカーウ書体風ではあるが文字形が整っていない。

B: 章題は細い2重線の枠があり、枠内が金色に塗られ、そこに白字で章名、啓示場所、その章

の節数がナスタアリーク (nasta'liq) 書体に似た文字で書かれている。章題スペースに金色を塗らない部分を残し、そこに前章テキストの最後の部分が書かれている箇所がある〔図 V B-2〕。クルアーンの末尾部は短い章が多く、1頁に章題スペースが幾つもあることになるが、この写本では金色の章題枠の幾つかをさらにピンク、水色、黄色などの枠で囲んで、カラフルに見せている〔図 V B-3〕。

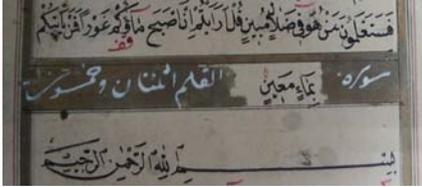


図 V B-2



図 V B-3

章名は 31 章が *sūrat al-malā'ika* (マデイーナ版では *fātir*) [B]、40 章が *sūrat al-mu'min* (同 *ghāfir*) [A・B]、41 章が *sūrat al-sajda* (同 *fuṣṣilat*) [B]、76 章が *sūrat al-dahr* (同 *insān*) [A・B]、107 章が *sūrat al-dīn* (同 *al-mā'ūn*) [A]、111 章が *sūrat tabbat* (同 *al-masad*) [A・B] などとなっている。

### 5. テキスト区分

各節の終わりには A、B とも金色の円が描かれている〔図 V A-2〕。B の彩飾頁ではそれより大きな金の円で、中心に白点があり、そこから放射状の黒線が外に向けて 6 本引かれ、円周と交わる場所に小さな赤点・青点が交互に配されている〔図 V B-1〕。各頁の最後はこの節区切りマークで終わる。すなわち節の途中で頁が変わることがなく、必ず節の区切りで頁が変わっている (このスタイルは *āyet ber kenār* と呼ばれる [Safwat 2000: 22])。



図 V A-2

各ジュズウは基本的に 10 葉ずつで左頁上から始まり、欄外に花模様の縦長のマークが描かれている〔図 V B-4〕。ただし、ジュズウ 1 は彩飾頁で始まるため、また最後のジュズウ 30 とその前のジュズウ 29 は章の数が多いため章題スペースが多く必要なことから、葉の数が少し多くなる。A ではジュズウ 29 が 11 葉、ジュズウ 30 が 12 葉、B ではジュズウ 30 が 13 葉となっている。ジュズウ 1 は A、B とも彩飾頁を含めて 11 葉である<sup>33)</sup>。ジュズウ冒頭欄外のマークは A では皆ほぼ同じだが〔図 V A-2〕、B では形や色の異なる模様が使われている〔図 V B-5〕。



図 V B-4

33) A の写本は葉の順序がかなり入れ替わっているが、本来の順序の場合を考えている。

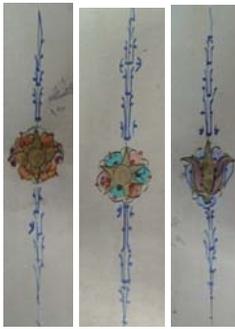


図 VB-5

A は各ジュズウをさらに4つに分けてそれぞれをヒズブとし、欄外に赤字で **حزب hizb** と記号化した文字形で記している。B では欄外に所々 **niṣf**, **hizb**, ‘**ashr** などの文字が主に赤字で記されているが、テキスト区分とは無関係に配されているように見える。

サジュダの箇所には A は欄外に **سجدة sajda** と赤字で記されている。B ではジュズウと同様のマークが描かれ、そこに **sajda** と書かれている [図 V B-6]。



図 VB-6

## 6. タジュウィード記号・キラア

A、B ともにテキストの文字の上側に赤字でマッド記号や **Sajāwandī** のワクフ記号が付されている。A の写本ではマッド記号は本来置かれるべき位置よりも長く、直線的である [図 V A-2]。ワクフ記号も元の文字形がかなり崩れたものがある。B では文字の下側にも赤字で別の記号が書かれている。短母音で読むことを示す **قصر qaṣṣir** や長母音で読むことを示す **مد madd** の文字記号などである<sup>35)</sup>。 **كوفي kūfī** と小さい赤字で記された箇所も幾つかある。クーファ (Kūfa) の人々のキラアやタジュウィードを示す記号と推測されるが、確実ではない。

A、B ともに、オスマン朝で一般的であったハフス伝承のキラアに沿って書かれている。

## 7. 奥付

A: 両面にドゥアーが書かれた葉が1枚あり、クルアーンのとおりと同じように節区切りのマークや小さい赤字のワクフ記号が記されている。通常ドゥアーは巻末に置かれるので、この葉もクルアーンの巻末にあったと考えられる。その他に奥付の書かれた頁はない。

B: 最終章のテキストの左下欄外にはキャッチワードの位置に **ṣadaqa Allāhu al-‘azīm** とあり、その下に1278の数字が見られる。次の頁 (f.605a) は前述のように彩飾された奥付頁となっており、卵形のテキスト枠の中に黒字のリカーウ書体で書かれている [図 V B-7]。それによると、この写本を書いたのは **Ḥasan al-Ḥusnī** という人物で、彼は **Qaysh zāde** として知られる **al-Ḥājj Ḥāfiẓ ‘Uthmān al-Nazīfī** の弟



図 VB-7

34) ダイバー・コレクションの中のクルアーン写本 Vol.1 の MS.51 と MS.287 もこのスタイルに沿って作られているように見える。但し前者には葉の抜けと頁番号の抜けがあるため葉の数が合っていない。

35) イスタンブール版のクルアーンに同様の記号が記されているところから、このように考えられる。

子の1人であるという<sup>36)</sup>。こちらには日付は1279年(西暦1862-63年)と、数字ではなく文字で書かれている。

## 終わりに

世界にクルアーンの写本は数多く存在するが、海外の大学・博物館と比較すると、日本の大学・博物館が所蔵するクルアーン写本は極めて少ない。しかし、クルアーンテキストは確定したもので、内容はすべて同じとみなされたためか、日本の個々の写本の詳細まで調べた文献はほとんど見られない。そこで閲覧可能なクルアーン写本数点を実見し、調査、比較してみた。その中でも、今回紹介した国立民族学博物館のものは、サハラ以南アフリカから東南アジアまでの広い地域にわたるコレクションであり、上述のように、写本の書体や彩飾法、フォーマットなどにそれぞれの地域や時代の特徴がはっきりと見られ、興味深いものである。

付表：Sajāwandīのワクフ記号

م	وقف لازم	waqf lāzim	休止しなければならない
ط	وقف مطلق	waqf muṭlaq	休止する方が良い
ج	وقف جائز	waqf jā'iz	休止しても良い
ز	وقف مجوز لوجه	waqf mujawwaz li-wajh	休止しない方が良い
ص	مرخص ضرورة	murakhkhaṣ ḍarūra	必要な時は休止しても良い
لا	وقف ممنوع	waqf mamnū'	休止しない

以上の説明は簡略化したものであり、厳密なものではない。

## 参考文献

<クルアーン>

*Qur'ān-i Majīd*. 1377AH. Tehrān: Kitābfurushī islāmīyah.

*al-Qur'ān al-Karīm*. 1430AH. Madīna: Mujaṃma' al-Malik Fahd li-ṭibā'a al-muṣḥaf al-sharīf.

*Qur'ān Karīm*. 1969. Tūnis: al-sharika al-Tūnisiyya li-l-tawzī'.

*Wa-innā nahnu nazzalnā al-dhikr wa-innā la-hu la-hāfiẓūn*. 1973. Bayrūt: Maktabat al-riyāḍ al-ḥadītha.

*Kur'an-i Kerim* (Hat: Hüseyin Kutlu). 2010. Istanbul: Define Yayinlari.

<日本語文献>

黒柳恒男(訳)1976『ハーフィズ詩集』(東洋文庫299)平凡社。

堀川徹・谷口淳一(編)1998『アラビア語写本目録』京都外国語大学付属図書館。

<外国語文献>

Baker, Colin F. 2007. *Qur'an Manuscripts: Calligraphy, Illumination, Design*. London: The British Library.

Bayānī, Mehdī. 1363 (1984). *Aḥvāl va āṣār-i khowsh neviṣān*. Tehran: Enteshārāt 'elmī.

Bayani, Manijeh, Anna Contadini & Tim Stanley. 1999. *The Decorated Word: Qur'ans of the 17th to 19th Centuries* (The Nasser D. Khalili Collection of Islamic Art; v. 4, Part1). London: Nour Foundation.

36) Hasan al-Husnīについては不明。Dermanは、美しいナスフ書体のクルアーン写本で知られる Kayışzāde Hāfiz Osman (d. 1894) という書家を紹介している [Derman 1998: 130]。この人物は Nūrī とか Burudūrī と署名することもあっても、Nazīfī と署名することはなかったようだ。従って、この写本の書家の師とは別の人物なのであろう。

- . 2009. *The Decorated Word: Qur'ans of the 17th to 19th Centuries* (The Nasser D. Khalili Collection of Islamic art; v. 4, Part 2). London: Nour Foundation.
- Blair, Sheila S. 2006. *Islamic Calligraphy*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Brac de la Perrière, Éloïse. 2003. "Bihārī et naskhī-dīwānī: remarques sur deux calligraphies de l'Inde des sultanats," *Studia Islamica* 96, pp. 81–93.
- . 2008. *L'art du Livre dans l'Inde des Sultanats*. Paris: Presses de l'Université Paris-Sorbonne.
- Brigaglia, Andrea. 2013. "Central Sudanic Arabic Scripts (Part 2): Barnāwī," *Islamic Africa* 4(2), pp.195–223.
- Brockett, Adrian. 1984. "Studies in Two Transmissions of the Qur'an," PhD thesis, University of St. Andrews.
- . 1987. "Aspects of the Physical Transmission of the Qur'ān in 19th Century Sudan: Script, Decoration, Binding and Paper," *Manuscripts of the Middle East* 2, pp. 45–67.
- Churchill, W. A. 1965 (reprint of 1935). *Watermarks in Paper in Holland, England, France, etc. in the XVII and XVIII Centuries and their Interconnection*. Amsterdam: Krips Reprint.
- Derman, M. Uğur. 1998. *Letters in Gold: Ottoman Calligraphy from the Sakip Sabanci Collection Istanbul*. New York: the Metropolitan Museum of Art.
- . 2010. *Ninety-nine Qur'an Manuscripts from Istanbul*. İstanbul: İstanbul 2010 Avrupa Kültür Başkenti.
- Gacek Adam. 2012. *Arabic Manuscripts: A Vademecum for Readers*. Leiden & Boston: Brill
- Gallop, Annabel Teh. 2004. "An Acehnese Style of Manuscript Illumination," *Archipel* 68, pp.193–240.
- . 2005. "Beautifying Jawi: Between Calligraphy and Palaeography," in Asmah Haji Omar (ed.), *Malay Images*, Tanjung Malim: Universiti Pendidikan Sultan Idris, pp.194–233.
- . 2007. "The Art of the Qur'an in Southeast Asia," in Fahmida Suleman (ed.), *Word of God, Art of Man: The Qur'an and its Creative Expressions*, Oxford: Oxford University Press, pp.192–204.
- James, David. 1992. *After Timur: Qur'ans of the 15th and 16th Centuries* (The Nasser D. Khalili Collection of Islamic art; v. 3). London: Nour Foundation.
- Khārūf, Muḥammad Fahd. 2000. *al-Muyassar fī al-qirā'āt al-arba'-'ashara*. Dimashq-Bayrūt: Dār al-kalim al-ṭayyib.
- Losty, Jeremiah P. 1982. *The Art of the Book in India*. London: the British Library.
- Safwat, Nabil F. 1996. *The Art of the Pen: Calligraphy of the 14th to 20th Century* (The Nasser D. Khalili Collection of Islamic Art; v. 5). London: Nour Foundation.
- . 2000. *Golden Pages: Qur'ans and Other Manuscripts from the Collection of Ghassan I. Shaker*. Oxford: Oxford University Press.
- Stanley, Tim. 2004. "Page-setting in late Ottoman Qur'āns: an Aspect of Standardization," *Manuscripta Orientalia* 10(1), pp.56–63
- Walz, Terence. 2010. "The Paper Trade of Egypt and the Sudan in the Eighteenth and Nineteenth Centuries and its Re-export to Bilād al-Sūdān," in Graziano Krätli & Ghislaine Lydon (ed.), *The Trans-Saharan Book Trade: Manuscript Culture, Arabic Literacy and Intellectual History in Muslim Africa*, Leiden: Brill, pp.73–108.